

普及情報

中山間地域における堆肥流通システムの構築 ～やぶし有機の里づくりを目指して～

はじめに

2003年からおおや堆肥センター（以下「堆肥センター」）が稼働し、旧大屋町では「おおや有機の里づくり」を展開してきた。しかし、大屋地域以外では土づくりが進まず、また、畜産農家は自作地のみで堆肥を散布し過剰な農地還元になっていた。これらの問題を解決するため、2005年に農家と行政機関で構成する「養父市家畜排せつ物さわやか利用検討委員会」（以下「さわやか検討委員会」）を設置し、養父市全域で土づくりを進める「やぶし有機の里づくり」に取り組んだ。

普及活動の内容

1 関係機関の合意形成

普及センターでは、さわやか検討委員会を合意形成の場と位置づけ、堆肥散布システムや有機の里づくりの具体的な取り組みについて提案を行った。この結果、広域的な散布システムの確立に向けて大屋地域以外で堆肥のモデル散布が実施された。

2 市全域堆肥散布に向けた散布方法の検討

狭小な水田が多い大屋地域ではフレコンバック方式による堆肥散布システムが確立していた。その他の地域では一部でキャリアブリッジ方式（写真）が導入されていたが、畜産農家の減少や堆肥散布農地の点在化による作業効率の悪化等の問題があって機能していなかった。そこで、散布機械を地域・組織間で貸借したり、散布作業を補完できる体制づくりについて関係機関と共に検討した。

3 堆肥散布の拡大に向けた活動

堆肥のモデル散布ほ場は、作付面積から今後の波及効果が期待できる水稲に絞り、普及センターはその中で堆肥を施用した水稲栽培の技術実証ほを設置し、堆肥利用技術の普及を図った。

活動の成果と波及

1 堆肥流通システムの確立

2007年9月、畜産農家8戸で構成する「養父市堆肥散布組合」（以下「散布組合」）が設立された。さらに、堆肥センターと散布組合が連携し、相互に堆肥の需給調整や散布作業を補完するとともに、遊休施設をストックヤードとして整備することで、広域堆肥散布システムを構築した。その結果、散布エリアは市内全域に広がり、2004年度の30haから2008年度には66haに増加した。



キャリアブリッジによるマニュアルスプレッダーへの堆肥の積み替え

2 土づくり推進協議会の発足

堆肥の供給体制が整ったことを受け、2008年7月に各地域の農会代表、JA水稲生産部会、散布組合及び関係機関で構成される「やぶし土づくり推進協議会」が設立された。協議会では、堆肥利用面積の拡大、堆肥を利用した水稲栽培技術の定着、堆肥の安定供給を重点的な事項として活動している。

土づくりの推進組織が一本化されたことから、今後は地域全体の土づくりがより効果的に推進できるものと期待されている。

守谷 吉弘（朝来農業改良普及センター）
（問い合わせ先 電話：079 - 672 - 6890）

ひょうごの農林水産技術 No.167

平成22年1月1日（隔月刊）

兵庫県立農林水産技術総合センター（0790）47 - 2400

21農P2-001 A4